

## 美の観賞会だより 第4号

令和3年6月3日

秋山 卓男

### 美の原点 (4) 鳥

花と鳥は美しい。鳥では雄が美しいものが多い。雌の鳥の気を引くために美しくなったのであろう。人間が、美しい雄の鳥を見て何故美しいと思うのか。これは人間の心とはなにかという問いにつながる。宇宙は人類という知性を持った生物を生み出した。知性にとって知性を内包する心とは何かということと、知性を育んだ宇宙はどのようにできているのかということは究明すべき最大の問題であろう。

目の前に一羽の孔雀がいる。その孔雀が突然大きな羽根を広げた。その姿の美しさに一瞬我を忘れて見入る。はっと我に帰り、なんと美しいのだろうと感動している自己に気が付く。人は美しいものを見たとき、このような心理過程を経験する。ここに美を感じずる原点があると思う。一瞬の我を忘れた状態には、見ている自分とみられている孔雀との差別がない。ふっと我に帰った時、見ている自己とみられている孔雀との差別があり、そして感動している自分を発見する。われを忘れた状態は、主観と客観の差別がない世界でこの状態を空（くう）という。空には虚無ではなく全存在が詰まっている。主観と客観の区別のある状態を色（しき）という。空を体験した色は主観と客観は本来同一であると自覚した上での差別の世界である。この心理過程を「色即是空 空即是色」（般若心経）という。

さて、平安時代後期の作品で、絹本着色孔雀明王像（国宝、東京国立博物館蔵）がある。きれいな羽根を広げている孔雀の上に密教の尊格である明王が鎮座している図である。孔雀の羽根は美しいが、毒蛇を食べ、その毒を甘露にしてしまうという強さも兼ね備えているので密教では信仰の対象となった。美術収集家で有名な原三溪（本名 富太郎 1868～1939）が35歳の時、所有者前蔵相井上馨から当時としては破格の1万円で購入して話題になった。

鳥を描いた作品では、伊藤若冲（1716～1800）の作品が頭抜けている。動植綵絵30幅は白眉である。中でも老松白鳳図は松と白鳳という想像上の鳥を描いている。面白いのは尾の先の羽根に16個の赤のハート形と2個の緑のハート形の模様が描かれていることと、白鳳の顔が女性的色気にあふれていることである。雪梅雄鶏図、仙人掌群鶏図襖、南天雄鶏図、白梅錦鶏図の鶏の描写は他の追従を許さない。池辺群蟲図のかえる、蛇、蝶、とかげ、トンボの描写も見事である。

華やかな若冲の絵に対し、宮本武蔵（1584～1645）の水墨画、枯木鳴鶉図（こぼくめいげきず）は対照的である。長い枯木のとっぺんに一羽の鶉（もず）が寂しげに止まっていて、鶉と



宮本 武蔵 “ 枯木鳴鴉図 ”

枯木のバランスが実に見事である。小さな鴉は武蔵自身の孤独を表現しているのであろう。枯木の途中に小さな芋虫が描かれている。何を意味しているのであろう。

手塚治虫（1928～1989）の最高傑作火の鳥は、漫画を芸術作品にまで高めた画期的作品である。主人公の火の鳥は若沖の白鳳図を連想させる。芸術性と文学性を兼備した傑作である。

宮崎駿（1941～）のアニメ、風の谷のナウシカは1984年に公開された。その時、デズニーのアニメ作品を超えた作品を日本が作ったと思った。核の問題、環境問題、ひいては人間社会をいかに持続的に発展させていくかの問題意識が底流にある作品である。王蟲（オーム）という巨大な架空の虫が出てくる。鳥を虫や動物まで連想を広げると、オームも面白い。

東京国立博物館で展示されている（2021年4月13日～6月20日）国宝鳥獣戯画は鳥やかえる、うさぎ、猿、鹿等が描かれ、特にかえると兎が相撲を取っているシーンが面白い。

昭和33年に静岡商業高校を卒業した版画家の海野光弘氏（1939～1979）は高校2年生の時、一連のかえるの版画作品を制作した。かえるに対する愛情があふれ、なかなかの傑作である。

静岡商業本科を大正2年3月に卒業した北川民次氏（1894～1989）はメキシコで活躍した画家であるが、メキシコで神聖な生き物とされているバッタを数多く描いている。特にバッタの版画は良い作品が多い。

ゴーガン（1848～1903）の大作「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」は横 375 cm、縦 139 cmの横に長い作品である。右端に赤ん坊がいて左端に老婆がいる。人の誕生から死までの人生を俯瞰した構図になっている。老婆の左に白い鳥がいる。この白い鳥は死を象徴しているのであろう。

ゴッホ（1853～1890）の最晩年の作品、カラスと麦畑は黄色の麦畑の上を無数の黒い鴉が地平線上の暗い空へ飛んでいく絵で、この世からあの世へと飛んでいくような不気味さを感じさせる絵である。

鳥は、東洋では美しいものの代表として描かれている。西洋では、鵲（かささぎ）が、古来、死と関連づけられているので、鳥は、暗いイメージを持ったものとして描かれているケースが多いように思える。

次回は、「美の原点（5）風」を発行いたします。